

## Focus on Housing

フォーカス|住宅|

ソトマで育てる、ソトマでつながる(愛知県日進市)

設計:名古屋大学協坂圭一研究室(当時)、笹野空間設計、ヒュッゲ・デザイン・ラボ 施工:丸長ホーム、成正建設

# 3区画を一体で開発 共用の中庭で交流を促す

3区画の敷地を一体で開発し、外構や住宅の設計の自由度を高めた。敷地境界線をまたいで共用の中庭を設け、各住宅の交流の場に。設計中から建て主たちと協議を重ね、納得度の高い設計を実現した。

愛知県日進市の新興住宅地に、3戸分の敷地を一体で開発した一面がある。敷地境界線上に柵などを設けず、子どもたちの遊び場である中庭を「ソトマ」と呼んで共用。各住宅の家族同士の交流を促す。

2.35mの高低差がある敷地を、各住宅の敷地間が断絶しないように、原則として高さ40cmごとに緩やかに段差を設けた。芝生が植えられたこの段差に、腰掛ける子どももいる。

「敷地内で日常的に頻りに顔を合わ

せるので、自然に対話が生まれる」と住民は口をそろえる。共用の砂場で遊ぶ子どもたちは互いの家を行き来する。敷地境界線や道路境界線上にコンクリートの擁壁や柵などが無いので、近隣の子ともたちも遊びにやってくる。

### 大学研究室が設計を先導

中庭を共用するといった全体のマスタープランと各住宅の設計案は、2013年に開催された公開コンペで、名古屋大学施設計画推進室の協坂圭一研究

B棟のテラスから中庭を見る。左手がA棟、奥がC棟。窓や柵を設けず、敷地境界線を曖昧にして、各住戸の住民が中庭を介して交流することを促す(写真:72ページまで特記以外は吉田誠)

動産会社と連携し、愛知県内を中心に、設計業務にとどまらず、宅地開発の企画や調査も手掛ける。今回の計画も、地元の不動産会社が開発した全28戸の住宅地の一面にある。

協坂研究室の提案を選んだ決め手として間宮代表は、「中庭を含めた外構を一体で開発し、共用するアイデアを評価した」と語る。

静岡理工科大学の協坂圭一教授(当時・名古屋大学准教授)は、「砂場を中心とした共用の中庭を介し、周辺住民を含めて交流が生まれ、共同体が育まれることを狙った」と語る。

設計に当たっては、協坂研究室が建て主の要望を引き出しながらデザインを提案。協坂研究室の学生が建て主と打ち合わせ、そこで聞き出した要望を、協坂教授が主宰するヒュッゲ・デザイン・ラボや笹野空間設計などと設計に反映。学生も積極的に図面を描き、笹野空間設計が実施設計に落とし込んでいった(図1、写真1)。

### 「ズレ」で空間に変化を

コンペの狙いの1つは、東海地区内の大学で建築を学ぶ学生に、設計の実務に関わるチャンスを与えることだった。当時、協坂研究室の学生だった神谷亮賢氏(現・間宮農一デザインスタジオ)は、リーダーとしてコンペ案をまとめ、主にB棟の設計に参加した。

神谷氏は、「各住宅の設計には共通ルールを設けて、統一感を持たせた」と話す。例えば、リビングを中庭に面し

室が提案したものだ。東海地区4県にある大学の研究室を対象としたこのコンペで、応募した19案から選ばれた。

コンペの主催者は、日進市にある設計事務所の間宮農一デザインスタジオだ。間宮農一代表は、地元の不